

藝大通信

18

MARCH
2009

TOKYO
GEIDAI
東京藝大広報誌

特集 社会とつながる演奏会活動

[特集座談会]

守山光三 多田羅迪夫 佐野 靖 松下 功

教員は語る 第十回 元倉眞琴×尾高忠明

新連載 受賞学生インタビュー 福島沙由美 上野星矢

藝大の歩き方 第十回 不忍荘

上野の杜の波瀾万丈 第七回 中国人留学生一斉帰国



中村キース・ヘリング美術館

北川原温教授（美術学部建築科）設計。2007年竣工。
「キース・ヘリングの世界～混沌から希望へ～」をテーマに、アメリカの画家
キース・ヘリングのコレクションのみを展示するプライベート美術館。所在地は
山梨県北杜市小淵沢町。「人間の心に根付く闇と希望を描いた作品の展示にふさわ
しい空間」として第21回村野藤吾賞を受賞。なお、この建築はアメリカ建築
家協会JAPANデザイン賞も受賞した。

第18号目次

3....11 特集

社会とつながる演奏会活動

[特集座談会]

藝大のブランド力 藝大のアピール力
守山光三 多田羅迪夫 佐野 靖 松下 功

社会連携演奏会の概要

藝大メサイア 伊澤修二先生記念音楽祭
台東第九公演 日本国際賞

12....13 藝大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第10回 不忍荘 上田喜一郎

14....15 上野の杜の波瀾万丈

第7回 中国人留学生一斉帰国 吉田千鶴子

16....17 新連載

Interview with the Brilliant Students

受賞学生インタビュー

福島沙由美 上野星矢

18....21 教員は語る 第10回

藝大への期待・抱負・提言

元倉真琴×尾高忠明

22....23 NEWS2008.8～2009.1

編集後記

東京藝術大学広報誌
藝大通信 第18号

編集発行
東京藝術大学藝大通信編集部

編集委員
長濱雅彦（美術学部デザイン科准教授・編集長）
飯野一朗（美術学部工芸科教授）
稲川榮一（音楽学部器楽科教授）
檜山哲彦（音楽学部音楽文芸教授）

アートディレクター
連見智幸（美術学部デザイン科教授）

制作
株式会社 平凡社

発行日
平成21年3月10日

お問い合わせ先
東京藝術大学総務課
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 050-5525-2026 FAX 050-5525-2479
e-mail toiwase@ml.geidai.ac.jp
URL <http://www.geidai.ac.jp>

特集

社会と

つながる

演奏会活動

さまざまな展開をみせる音楽学部の社会連携。

多彩なパートナーが演奏活動とおして藝大に期待するもの

藝大が新たに獲得するものに光をあてる。



藝大のブランド力 藝大のアピール力

代表的な四つの演奏会活動

司会 今回の『藝大通信』では、音楽学部が地域、企業、各種団体等と進めている演奏会活動を集めました。代表的な四つの活動、「藝大メサイア」「伊澤修二先生記念音楽祭」「台東第九公演」「日本国際賞」について、それぞれに関係の深い先生方から内容を紹介したいと思います。

多田羅 「藝大メサイア」は朝日新聞社の主催で、戦災孤児を含む恵まれない人たちに對する、社会的なチャリティーが求められていた時代を背景に始まりました。

一九五一（昭和二十六）年に行われた第一回は、音楽学部の学生と教官二三〇名全員が無償で出演し、三〇名のオーケストラと全学生による合唱、声楽教官のソロによる演奏だったそうです。当時の演奏スタイルは、現在のロックの演奏の主流である

軽快さというよりは重々しい音楽であっただろうと想像できます。それは私が学生のとき、第一回で指揮をなさった金子登先生指揮の非常に遅いテンポで重厚な音楽づくりの「メサイア」を経験しているからです。当時、演奏会の収益金は文房具や玩具に子どもたちのところに配って歩いたそうです。またそのときに上野動物園のサルやシカといった動物たちも一緒にまわったと記録に残っています。

二〇〇〇（平成十二）年に五十回、昨年末に五十八回目を迎えました。五十周年を迎えた当時の新聞には、これから先も五十年経って「二世紀を迎える」と発表されているのですが、この責務を積極的に捉え、藝大が社会に対して何をなし得るかというケースとして大きく評価できるものになるであろうと思われれます。

佐野 「伊澤修二先生記念音楽祭」は一九



守山光三（もりやま・こうぞう）
教授 — 音楽学部器楽科（ホルン）

1944年生まれ。
1967年東京藝術大学音楽学部器楽科ホルン専攻卒業。
1967年 旧西ドイツ・ベルリン音楽大学入学。1972年同大学卒業。
1968年以降、東京交響楽団、ベルリン交響楽団。ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団、ライン・ドイツオペラ、ドゥイスブルク交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団で演奏活動を行う。
1973年～78年ドゥイスブルク市立ニードーライン音楽学校講師。
1979年東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師。87年同助教授。
1999年～東京藝術大学音楽学部器楽科教授。

守山光三 音楽学部器楽科教授
多田羅迪夫 音楽学部声楽科教授
佐野靖 音楽学部音楽教育教授
松下功 演奏芸術センター教授

八七（昭和六十二）年十一月に、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校の初代校長を務めた伊澤修二の出身地、長野

県高遠町（現・伊那市高遠町）と連携して始めた音楽祭です。第一回は、当時の服部幸三音楽学部長が



多田羅迪夫 (たたら・みちお)
教授 — 音楽学部声楽科

1947年生まれ。
1969年東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。
71年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（オペラ専攻）修了。
1973～75年イタリア留学。75～77年ハイデルベルク市立歌劇場専属歌手。
77～81年ゲルゼンキルヒェン市立歌劇場専属歌手。
1982年東京音楽大学非常勤講師。
1982年東京藝術大学オペラ研究部（オペラ科）非常勤講師。
1986年東京藝術大学音楽学部声楽科非常勤講師。90年助教授。
2000年～東京藝術大学音楽学部声楽科教授。

記念講演をして、藝大オーケストラが演奏するという形でした。第二回は博士課程在籍のソリストが演奏を行っています。第三回からは私がかかわっているのですが、高遠町にある二つの小学校（高遠小と高遠北小）の児童による演奏や音楽劇の発表と、藝大音楽学部四年生のオーケストラ演奏という大きな枠組みができ上がり、以降この形がずっと続いてきています。

第五回からは、高遠町の中学校が参加するようにになります。これは第一回のように参加した当時小学校五年生だった子どもたちが中学校三年生になり、藝大オーケストラと合唱したいという旨を藝大側に伝えてきたことから始まったんです。以後毎年参加することになるので、これは画期的なことだったかもしれません。そのときにも偶然ですが「メサイア」の（ハレルヤ）を歌っています。

その後、高遠高等学校の生徒たちや地域の合唱団も加わり、オーケストラと共演するようになりました。このように地域の行政と学校、そして大学が連携して、二十年以上も音楽祭が続いているところは、日本中探してもほかにはないのではないのでしょうか。

ここ数年は音楽学部の学生オーケストラに対して各方面から声がかかることが多くなってきましたが、二十三年前には大学が地域に出かけていくというとはかなり珍しい時代でした。そのあたりの時代背景も変わってきていますが、この伝統は大切にしていきたいと思っています。

守山 「台東第九公演」は二十八年前、一

九八一（昭和五十六）年にスタートし、来年度で三十周年を迎えます。

当時の下町地域は人口がどんどん減少し、中学校も統合されるなど元気がなくなっていました。そうした下町に元氣を取り戻そうと、当時の内山榮一（台東区長）が「浅草サンバカーニバル」とともに考案したのがこの「台東第九公演」でした。当時の教育長が台東区合唱連盟にペーターヴェンの「第九」を歌ってみたいかと働きかけて企画が始まり、同区内にある藝大にも協力を要請してきたわけです。当時の藝大にはそういった前例がない時代でしたが、音楽学部長であった声楽科の渡辺高之助先生が賛同し、そこから話が進み実現したそうです。

最初は合唱に集まった人数が一七〇名ぐらいでレベルもそれほど高くなかったようです。三回目ぐらいから二百数十名が集まるようになり合唱団として形になってきて、以後その規模をキープしています。

下町に「第九」が定着したのは意外かもしれませんが、昔から上野、浅草の人たちはクラシックが好きだったというのです。合唱に集まってくるメンバーの中心が、伝統的な職人さんや下町の商人の方々だというのは興味深いことだと思います。

松下 「日本国際賞」は、これまでの三つの演奏会とは性格が異なり、「受託事業」という形で行っています。

「日本国際賞」は今年で二十五回目を迎えますが、藝大で演奏を受託するようになってからは四年前からです。この賞は財団法人国際科学技術財団の主催で、世界中の科学者を対象に、人類の平和と繁栄に著しく貢献した人物に賞を授けようという趣旨で設

立された、ノーベル賞クラスの価値ある賞なんです。

授賞式は国立劇場で行われ、天皇・皇后両陛下のご臨席を仰ぐという大変大きな式典なので、これまではプロのオーケストラが演奏を務めていました。ところが受賞者が入場してくるたびに科学系・物理系の大学院生が先導するものですから、演奏も若い人たちにお願したいと、藝大に声がかかったのです。

授賞式では、受賞者が希望する曲を三十分以内にまとめて演奏するというのが大きな務めとなっていますが、開場時の演奏も行っており、これまでは受賞者が入場するときにロビーで弦楽四重奏を演奏していました。しかし、舞台が国立劇場なので「和」の音も欲しいという要望が出たことから、邦楽科を有する藝大ならではの邦楽演奏を受賞者が入場する前に花道で行うようになりました。こちらもご臨席の各国大使の方々には「和」の音色を聴いていただくと、非常に評判がいいようです。

連携のあり方と課題

多田羅 「藝大メサイア」が始まった当時の世相と比べると、五十八年が経過した社会状況が大きく変化していますから、主催者である新聞社の立場と、私たち藝大の立場とが随分違ってきているのではないかと思います。「藝大メサイア」は毎年十二月中旬に行われる恒例化した慈善事業として定着してきましたし、藝大もそれに協力してきましたわけですが、藝大ではその時期にはまだ授業が行われているのです。慈善事業と

いう社会に貢献する活動に参加するのであっても、声楽科の学生にとって授業との両立が困難になってきているのも事実です。

ただこの件に関しては、公演の開催時期を授業の終わっている時期にずらしていただくよう新聞社にお願いするなどして、徐々に解決の方向には向かっています。

佐野 「藝大メサイア」は企業が主催であっても、非常に公共的な意味があったわけですよ。さらに藝大声楽科の学生たちにとっても「メサイア」のソリストになるという大きな目標があつて、学内の盛り上がりや社会の期待がうまくつながった結果だと思ふのです。

「伊澤修二先生記念音楽祭」の場合は、近代日本の音楽教育の祖である伊澤修二の出身地であるという郷土の誇りを大切にしたいと思つていた高遠町と、音楽学部創設者の生誕地を訪れることに教育的な意味があると考へていた藝大との思惑が合致し、創立百周年を機に連携が開始されたのです。高遠町の行政や藝大指揮科の尽力もあつてうまく運営されてきたし、今では四年生オケの卒業旅行的な位置づけともなつていますが、「藝大メサイア」のように、学内からソリストを選び派遣するなどの、いい意味で学生相互が切磋琢磨する盛り上がりがある。もう少しあつてもよいのではないかと思つています。少なくともオーケストラに関する学生しかこの音楽祭に参加しない、他専攻の学生はほとんど知らないという認知度については、参加の仕方や広報を工夫し、もう少し学内に拡げていくことで、音楽学部全体としての連携にしていかななくてはならないと思つています。

松下 国立大学法人化以前は「受託事業」

は難しかったのですが、法人化されてからは収入が得られるような仕事もできるようになりまし。しかし、演奏によって収入が得られるからといって、何にでも乗り出していいというわけではないですし、その基準が難しいと思ふんです。「受託事業」は、これから藝大というブランドの売り出し方を考えるうえで、表へ出ていくためのよいステップではあるのですが、そのぶん慎重に進めていかななくてはならない分野です。

その一方で、いつも同じことをやっていれば仕事に来るわけではないですから、時代のニーズに合った新しいアイデアを持つていなければいけませんし、基本は大事にしつつも周りの状況をよく見て事業を展開していく必要があると思ふいます。

多田 学外から藝大の学生に対して演奏を依頼してくる事例が最近特に増えています。藝大が持つている演奏というコンテンツを社会に提供し、それに対する謝金をいただくわけですが、現実的には演奏に対するコストを引き下げることに貢献してしまふという側面もあるので、その関係をうまく整えないといけません。つまり、一般の演奏家に頼むよりも、藝大の学生に頼んだほうがクオリティが高いうえに廉価であるというように、社会的に利用されてしまふことが危険なのです。教員や学生の演奏活動と社会貢献のバランスをうまくとりながら進めて行かなければならないと思ふいます。もう一つの問題として、政府は国立大学法人に対して民間資金導入を推進するよう指導していますが、そのわりには体制その



佐野 靖 (さの・やすし)

教授 — 音楽学部音楽教育

1957年生まれ。

1981年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。

85年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（音楽教育）修了。

1986年同博士課程中途退学。

1986年東京学芸大学助手。

1988年東京藝術大学音楽学部講師。1990年 同助教授。

2006年東京藝術大学音楽学部教授。

ものが整っていません。我々がオペラ公演を行う場合、予算が非常に削減されるなか、各方面において教員が寄附を集めているのですが、そうした行為が民間資金を導入することであるとすれば、筋が少し違ふと思ふのです。

守山 寄附について触れておきますと、日本の政府にそういった認識が希薄なんだと思ふのです。要するに企業の寄附に対する税制優遇策を欧米並みにする必要がありま

す。日本と比較して、欧米のほとんどの国では、歴史的背景もあるかもしれませんが、税制上の寄附金に対する税控除の範囲が広く、また控除限度額が高く設定されているんです。

アメリカなどでは、そうした優遇策を利

用して私立大学はお金を集めています。ですから優秀な学生は公立よりも私立大学に集まるわけです。ところが日本の場合、そうしたシステムをつくらないまま国立大学を法人化してしまつたんです。教育研究の成果を外へ持つていって見せるにもお金が必要なのです。ですから、官が主体となつて寄附を集めることができるシステムをつくり、それが文化に配分されるというのが理想だと思ふのです。

さまざまな展開

松下 最近の藝大の学外における演奏活動として、春と秋の褒章伝達式等で藝大フィラハーモニアと邦楽科が演奏を行つていま



松下 功 (まつした・いさお)
教授 — 演奏芸術センター

1951年生まれ。
1977年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。
1979年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程(作曲専攻)修了。
1979~84年ベルリン芸術大学留学。
1988年東京藝術大学音楽学部作曲科非常勤講師。
1998年長野オリンピック公式文化プログラム・オペラ「信濃の国・善光寺物語」作曲
及び開閉会式入場行進曲の作曲。
2000年ベルリン・フィル・サマーコンサートで
和太鼓協奏曲「飛天遊」が好評を博す。
2003年東京藝術大学演奏芸術センター助教授。
2006年東京藝術大学演奏芸術センター教授。

す。これは文部科学省からの受託事業となつています。内閣府の「みどりの式典」でも藝大フィルハーモニアが演奏しています。演奏はどちらも弦楽四重奏など小規模の編成ですが、音楽の重要性を認識していただいているのではないかと思います。

高町や妙高市でも行っていますが、やはり年の近い学生に教わるほうが緊張しないですね。
藝大音楽学部の一つの利点は、やはり藝大フィルハーモニアというプロのオーケストラを持つていることなんです。多田羅先生担当の芸術活動推進委員会には外部からの演奏依頼がたくさん来ますが、これは学生ができる演奏会かどうかと、仕分けをしていくわけですね。そこで授業との絡みや、演奏会の性質などを考慮して、学生には向かないような場合はプロである藝大フィルハーモニアを派遣するわけです。そういう意味で、藝大が請け負う演奏会でも、いろいろなバリエーションが可能になっていきます。

松下 受託事業では、ほかに「LEXUS Concert」というものがあります。これはトヨタの高級ブランド、レクサスを購入した顧客の方たちのために行うコンサートで、これまでに三回実施されています。

当初は自動車のディーラー企業から、店舗で演奏会をして欲しいという話だったので、学生に一企業の宣伝をさせることはできないと対応しました。ところが、そういった趣旨ではないという話だったので、各店舗で実際に行われている演奏を聴きに行つたうえで、お受けすることにしました。

お受けするからには、演奏会は店舗ではなく音響効果のしっかりしたコンサートホールで行いたいと奏楽堂で行うこととしました。当初、チラシのデザインに自動車をお載せるところ、「車はやめてください。車を売るためにやるんじゃないんです」と言われました。むしろ社会貢献の一環として行いたいということで、実際、藝大にも貢献してくれています。

耳の肥えたお客さまもいるので、毎回プログラムを変えていかなければなりませんし、藝大のよさも順番に出していかなければなりません。ですから、例えば今後は邦楽科による演奏も実施したいと思っています。

藝大としてはいい演奏を提供して、その後の演奏会にもお越しいただけるような関係を築いていきたいですね。

藝大ブランドの活用と可能性

している時間が命なんです。社会と連携するということは、奏楽堂で行う演奏会とはかく、例えば高遠町で行われる場合、何人もの演奏家がそこまで足を運ばなければならぬわけです。

だからそれだけのインパクトがあるわけですが、常に移動という問題がつきまといまふ。美術の場合はコンテンツが動かせるわけですから連携しやすいと思うのですが、音楽の場合は、その点が難しいのです。

守山 いろいろな連携の形があると思いますが、「東京藝術大学」に依頼するという意味なんです。外部から見ると、藝大は芸術の固まりなんです。藝大に触れることによって芸術的な雰囲気味わうことができると信じて、藝大に依頼してくるわけですね。ですから我々としては、それを裏切つてはいけません。

社会連携に卒業生を使うという手段もありますが、社会が何を求めているかと考えると、現役の学生、今藝大にいる人たちと同じ時間、同じ空間を共有したいというのがあるのではないのでしょうか。

多田羅 社会連携で藝大がなし得ることというのは、やはりブランド力とそのクオリティの高さ、この二つが社会に対して発信し得る一番大きな強みだと思ふんです。藝大音楽学部は演奏家の集団ですから、そのすばらしさを社会に発信しつつ、学生の教育との両立という問題とうまく整合性をつけられるかが今後のポイントになるのではないかと思います。こういった点をクリアするようなシステムづくりをもつと

佐野 音楽の難しいところは、演奏が常にライブであるということです。つまり演奏

もつと我々はしていかななくてはならないですね。

藝大メサイア

多田羅迪夫



上：第58回「藝大メサイア」2008年12月18日（木）。東京文化会館 大ホール。

右：4人のソリスト。左から伊藤達人（テノール）、宮内朋子（アルト）、小林沙羅（ソプラノ）、加未徹（バス）。

「藝大メサイア」（朝日新聞社主催）は、東京藝術大学の教員・学生が無償で出演し、毎年十二月に開催されているチャリティー・コンサートである。その第一回は一九五一（昭和二十六）年十二月十八日、当時唯一のクラシック音楽演奏会場であった日比谷公会堂で演奏された。日本の戦後復興がまだ十分ではなかった時代、戦災孤児を含む恵まれない方たちにチャリティーを行い、藝大がメサイアを演奏することで救世主を迎えて社会を明るくしたいという想いがそこにはあった。演奏は音楽学部教官と学生二〇三名全員が無償出演して行われ、収益は全て社会福祉のために使われた。

歳末恒例の行事として親しまれた本公演の半世紀以上にわたる長い歴史のなかで、その演奏スタイルは徐々に変化してきている。それは即ち、日本音楽界のバロック音楽の演奏スタイルの変遷の歴史そのものであったともいえるだろう。当時、欧米のバロック音楽の演奏は、後期ロマン派的演奏スタイルが主流だった。新即物主義的演奏法の台頭の後、スイス、オランダ、イギリスを中心とするバロック音楽を研究・実践するグループが、ピリオド楽器（いわゆる古楽器）とその奏法について新たな研究成果を世に発表するなかで、音楽界においても大きな支持を受けるようになり、欧米の音楽大学に次々と古楽科が新設され、藝大音楽学部にも古楽専攻が設置された。その潮流がモダン楽器によるバロック音楽の演奏にも影響を与えたのは当然の成り行きである。モダン楽器を使用する藝大管弦楽研究部を擁する「藝大メサイア」も例外ではない。そして楽器だけでなく、声楽科学生による合唱団や独唱者たちの歌唱法も、ベルカント唱法と並行してピリオド奏法的歌唱法を徐々に身につけ始めた。そのことは大学院生向けの声楽特殊研究授業「宗教音楽」を担当している筆者が実感している。ごく初期の「藝大メサイア」でこそ独唱者を教官が務めたが、ある時期から学部声楽科学生の四年生からオーディションで選ぶ慣わしとなった。学生にとって独唱者に選ばれることは、卒業後の演奏家としてのプロフィールにそれを記載するほど非常に名誉なことで、過去の独唱者リストには多くの著名な声楽家が名を連ねている。第五十回を期に、学部生だけでなく大学院生にもオーディションの参加資格が与えられるようになり、それ以降大学院生が選ばれるケースが増えた。しかし、学部生が先輩を押しつけて選ばれるケースもあり、まさに実力次第でソリストに選ばれる競争原理による選抜方法は、独唱者の水準を高める好ましい結果を呼んでいる。また新設されてまもない古楽専攻在籍のカウンター・テナーが「藝大メサイア」アルト独唱者として登場したのもこの第五十回の時であった。これからの藝大メサイアがどのように変貌を遂げていくのか見守りたいのと同時に、ますますその演奏を進化させ、世界に向けて発信していくことを期待したいと思う。

伊澤修二先生 記念音楽祭

佐野 靖

「伊澤修二先生記念音楽祭」は、一九八七（昭和六十二）年、東京藝術大学創立百周年を機に始められた記念音楽祭。以来、藝大音楽学部にとっては、いわば秋の恒例行事の一つとして定着し、二〇〇八（平成二十）年度で第二十二回を数える。この音楽祭は、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校の初代校長を務めた伊澤修二が長野県旧高遠町（現・伊那市高遠町）出身ということにちなみ、毎秋、高遠町文化体育館及び伊那文化会館（第二十一回より）で開催されている。

音楽祭の内容構成は、高遠小学校・高遠北小学校が発表する第一部と、藝大四年生を中心とする学生オーケストラが演奏する第二部という大枠が、今日まで引き継がれている。そこに、地域の中学生や高校生、あるいは音楽祭のために結成された合唱団なども共演するなど、地域と学校、そして

大学が協働する音楽祭として発展してきた。また、音楽祭に参加した管楽器専攻の学生たちが、市内の中学校等で楽器指導も行うようになり、三者の結び付きは一層強くなっている。

このように地域・学校・大学が緊密に連携・協力した音楽祭は、全国的にも類を見ないものであり、地域活性化や文化の創造・発信という点でも、この音楽祭のもつ意義は計り知れない。こうした大イベントを二十年以上にわたって継続できているのは、旧高遠町及び伊那市の郷土への愛と誇り、音楽文化への深い理解があるからにほかならない。また、藝大側にとっても、音楽学部の創設者生誕の地を毎秋訪れ、四年生オーケストラが演奏を行うことは、自分たちの歴史を振り返るとともに、今を見つめ直し未来を展望するために、芸術的・教育的に大きな意味をもつものとなっている。



上：第22回「伊澤修二先生記念音楽祭」2008年10月25日（土）。長野県伊那文化会館 大ホール。指揮は道端大輝（指揮科4年生）。
右：藝大生による伊那市内の中学校吹奏楽部生徒への演奏指導。

台東第九公演

守山光三



上：第28回「台東第九公演」2008年12月14日（日）。東京藝術大学音楽堂。

右：指揮ダグラス・ポストック。独唱は左から岩下晶子（ソプラノ）、谷地畝晶子（アルト）、山本耕平（テノール）、新見準平（バス）。



「台東第九公演」は、台東区民で構成する合唱団に、藝大の教員や学生が、指揮、オーケストラ、ソリストとして協力し、一九八一（昭和五十六）年の初演以来、回を重ね二十八回の公演を数えている。

初演の時に台東区長であった内山榮一氏は、四期十六年にわたり区長を務められた方である。自らが祭好きということもあって「下町をなんとか元気にさせよう」と街の活性化に取り組まれ、区民が毎年「第九」を歌うことを提唱した。教育長とおして台東区合唱連盟に合唱への参加を呼びかけるとともに、藝大に対しての出演協力を要請を行うことから始めたが、公演の実現までには、準備期間を要することとなった。

藝大では現在、各地域と連携し数々の事業を行っているが、当時は地域貢献についてあまり積極的ではなかったため、出演協力の打診に対しての門は固かった。しかし、徐々に本学側の意識が地域貢献を重視する方向に変わってきたこと、区長及び教育長の想いが届き、一気に実現する運びとなった。時を同じくして、今では日本列島の隅々にまで知れわたっている「浅草サンバ」も内山区長の提唱で実現する運びとなっていたため、下町を活性化させるための

一大イベントである「夏のサンバ」、「冬の第九」が同時期にスタートすることになったのである。

第一回の公演は、区民で構成する「台東第九を歌う会」による合唱に、指揮者として大町陽一郎先生、オーケストラ演奏に管弦楽研究部、ソリストは大学院生が協力して、区内の浅草公会堂で行われた。第一回公演時に一七〇人程であった合唱参加者は、第三回以降になると二百数十人の募集定員を上回る数となり、やむなく抽選で参加者を決める状況となっている。そして、熱心に合唱練習を積み重ねた区民が参加する公演は、発売直後には入場券が完売し、毎回大好評のもと行われている。

また、公演のポスター制作には、かつて本学の教員をされていた福田繁雄先生が二十数年にわたって協力されており、二十五回目の公演となった二〇〇五（平成十七）年には、歴代の台東第九ポスター等を展示した展覧会が台東区によって開催された。

二〇〇二（平成十四）年以降、浅草公会堂から藝大音楽堂に場所を移して行っているこの公演が、台東区の芸術・文化の発展や活性化に、今後も貢献することを期待したい。

日本国際賞

松下功

「日本国際賞」は、財団法人・国際科学技術財団が主催し、世界の科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と反映に著しく貢献した人たちの顕彰を行うもの。授賞対象分野は、「基礎研究が発信する革新的なデ

バイス」と、「共生の科学と技術」の二分野で、世界の科学関係者たちの推薦を受けた数百件のなかから、二〜三名が選考されて賞が贈られている。これまでの二十四回の授賞式は、天皇后両陛下、三権の長を始めとする関係諸氏をお迎えして、毎年四月下旬に三宅坂の国立劇場において開催されてきた。

第一回の授賞式から、毎回プロのオーケストラが式典の音楽演奏を担当していたが、未来を担う若い人たちにもこの式典に参加してほしいとの意向で、二〇〇六（平成十八）年開催の第二十二回より藝大音楽学部学生オーケストラが参加している。式典では、授賞式での序曲「日本」、入退場、表彰の音楽を演奏し、後半は両陛下のご臨席

を仰ぎ、三十分の記念演奏を行っている。記念演奏会の曲目は、受賞者の希望曲より選曲されている。

初めて参加した授賞式では、小林研一郎教授（当時）が指揮を行った。その記念演奏会ではベートーヴェン、モーツァルト、ベルリオズの作品を演奏し、皇后陛下よりお褒めの言葉を賜った。第二十三回は招聘教授のダグラス・ボストック氏、第二十四回は矢崎彦太郎氏に指揮をしていただいた。いずれの回も、学生たちのステージ・マナーのよさと熱気ある演奏に、高い評価を得ている。

また、音楽学部邦楽科による開式前の演奏は、東京藝術大学ならではの企画と内容であると、列席者から賞賛された。「日本国際賞」では、授賞式の夜に祝宴が催される。毎回、弦楽担当教員を中心とした弦楽四重奏の演奏を行っているが、第二十四回より箏による「和」の響きを取り入れて、宴に彩りを添えている。



上・左：2008年4月23日（水）、東京半蔵門の国立劇場で開催された第24回「日本国際賞」の授賞式（2点とも写真提供：国際科学技術財団）。

の方 大の 藝 歩

—上野の杜のキャンパスガイド—

第10回★不忍荘

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る藝大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。

木造数寄屋造による風情ある建物

上田喜一郎

音楽学部側正門を入り守衛所の前を右に曲がって、左に事務局管理棟、右に学生会館を見ながら、その間の小径を下ったところ、小さな庭園の榎（ニレ科）の古木に寄り添うように建つ木造和風数寄屋造の建物が「不忍荘」である。大学の施設とは思えない風情の建物は、全国各地から来学する非常勤講師の宿泊や職員の会合などに利用するために、一九七九（昭和五十四）年に建設されたもので、現在まで数多くの大学関係者によって利用されている。不忍荘の一階には、玄関を入れて正面が坪庭、右側が集会や会合等に使用される十六畳（床の間、書院付）と十畳（広縁付）二間で構成する大広間、そ

れに待合い、厨房がある。また、玄関を上がって左側には、浴室、洗面、便所、控室があり、その奥は裏玄関、坪庭の裏側は、納戸となっている。玄関を上がって左に折れると階段があり、二階には南側に和室の宿泊室が三室、手前に談話室、奥に洗面と便所がある。建築手法的には、和風建築の第一人者である吉田五十八先生設計の松岡邸を参考に、その手法（ディテール）が生かされた造りとなっている。歴史を辿ってみると、不忍荘の建っている場所は、かつて東京美術学校と東京音楽学校とを隔っていた帝国博物館から桜木町へ抜ける西四軒寺通り跡に位置している。今も当時の道路と一



上：坪庭（1階）
左：玄関へのアプローチ



「不忍荘」外観



上：大広間の縁側
下：大広間（1階）

部土塁が残されているが、土塁の内側には、木造平屋建ての官舎とその脇に古井戸があった。その後、これらを取り壊して鉄筋コンクリート造平屋建ての車庫が建設された。この車庫建設に關しては苦しい思い出がある。工事が始まった頃、建物脇の榎の古木に白蛇が纏わり付いていた。古井戸の息抜きとお払いを怠っていたため、嫌な感じがしていたところ、車庫完成後に足を骨折してしまった。

一九七八（昭和五十三）年に現在の事務局管理棟と車庫が建設された後、奥まった地にあった車庫は、その躯体を残しながら木造数寄屋造の不忍荘に改築することとなった。玄関、縁側、建具障子廻り、天井など、平面的にも断面的にも大変苦労して造ったこの建物の中には、鉄筋コンクリート造の車庫が隠れている。（うへだ きいちろう／元施設課建築係長）



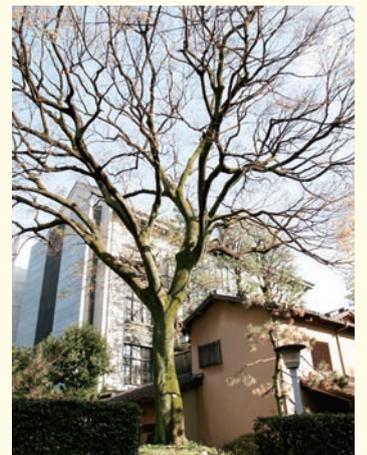
談話室（2階）



浴室（1階）



上：宿泊室（2階）
下：庭園の灯籠



庭園に立つ榎の古木

上野の杜の 波瀾万丈

第七回 中国人留学生 一斉帰国

一九三七年の日中戦争開始は
美校中国人留学生の一斉帰国と
日中美術交流運動の途絶を招いた。

吉田千鶴子



上：李叔同筆 卒業制作自画像 1911年 本学蔵
下：卒業記念写真中の李叔同（中央）

年間八千人にも達した中国人留学生

昨年（二〇〇八年）三月、北京の中国美術館で開催された林達川回顧展とそのシンポジウムに招かれた。林達川は広東省に生まれ、国立西湖芸術専科学校で学んだ後、一九三二（昭和七）年に来日。東亜予備学校、川端画学校、帝国美術学校等を経て三十五年に東京美術学校（美校）彫刻科に入学し、四十三年に卒業した。在校中から梅原龍三郎、安井曾太郎に私淑し、油絵も描き始めた。卒業までに八年もかかったのは、日中戦争勃発のため二年あまり休学・帰国を余儀なくされたからだ。

一九三七（昭和十二）年七月、日本を戦争の時代へと引き込んでいく日中戦争が勃発し、五千人近い中国人留学生が一斉に帰国するという事態となったが、美

校でも林のほか胡光弼、俞成輝、沈寿澄、趙琦、王氏廓、許統璋、沈柏年らの留学生が帰国した。林は華僑である父親の伝手で再来日し美校に戻ることができたが、ほかは復学することなく、抗日宣伝画の制作に腕を振るい魯迅芸術学院その他で教鞭をとった王氏廓を除いては帰国後の足跡は不明だ。多大な犠牲を払って来日し、憧れの美校に入学して本格的に勉強を始めたのも束の間、帰国せざるを得なかった彼らの心中は複雑だったに違いない。

この日中戦争によって日本と中国は敵対関係となり、一九七二（昭和四十七）年に国交が回復するまで疎遠な関係が続くことになる。その間、両国ともに長い激動の歳月を経過するなかで、かつての文化交流の歴史は忘れ去られ、交流が盛んとなった現今においてすら、それを思い起こそうとする人は少ない。しかし、日本

美術のメッカへの憧憬

と中国は古代からの関係は言うに及ばず、明治維新以後も文化交流が盛んに行なわれていたのである。その一例が本稿に関連のある中国人留学生のことであって、日清・日露の戦争に勝って強力な近代国家と目された日本に大勢の中国人青年が留学し、その数は最も多い年で八千人に達したという。美校でも一九〇五（明治三十八）年に第一号の黄甫周（舌画のパフォーマンズで名を知られた）が入学して以来、次々と中国人が入学し、中国人の存在は珍しいものではなくなったのである。

美校に限って見た場合、日中交流のパイプは留学生ばかりではなかった。東洋美術史教授の大村西崖は中国美術史学の発生に大きな影響を及ぼした学者として中国人によく知られていた。彼は幾度も訪中し、北京大学で講演したり日中美術家交流の拠点である西湖有美書画社を設立するなどして熱心に交流運動を進め、もちろん、美校の中国人留学生とも親交があった。例えば後年金魚大王と称した汪亜塵などは西崖の中国旅行のよき案内者であった。また、一九二二（大正十一）年から日中両国画家による日華聯合絵画展が中国と日本で毎年交互に開催されていたのだが、その日本側の代表は美校校長正木直彦で、事務局が美校内に置かれていたので、日中関係者の往来が頻繁にあり、中国人留学生にとって親しみやすい空気があった。しかし、そうした空気をも一掃してしまったのが日中戦争

だったのである。

ところで、美校で学んだ中国人たちが中国の近代美術および美術関連事業において主導的役割を担ったことは両国の研究者によってすでに検証済みだが、ここで特にユニークな存在として紹介しておきたい人物に中国人留学生第二号の李叔同（李岸、弘一大師）がいる。彼は帰国後中国の近代洋画・音楽・演劇の草分けとなり、のちに出家して修行に専念した。書家、思想家としても声望が高く、魯迅も心酔したという偉人であって、研究書も多く出ているが、近年、その激動の生涯が「一輪名月」と題する映画によって世に紹介され、一般にも大きな感銘を与えた。この映画は本学での取材も含めて制作された意欲作で、プー・ツンシンが李を、ビビアン・スーが日本人妻を演じ、第十一回中国電影華表賞優秀作品賞・最優秀男優賞を受賞した。DVDも発売されている。

この李叔同は西洋画科（のち油画科）の卒業生（一九一一年）だが、ほかの中国人も多くは西洋画科を志望した。それは同科が近代美術の中心地パリの美術学校で修行した黒田清輝をはじめとする教員たちによってフランス流の本格的な洋画教育が行なわれている場所であり、アジアにおける美術のメッカとして憧憬されたためである。時が経つにつれて他の科を志望する者も増えたが、それらも含めて合計すると美校が廃止になる一九五二（昭和二十七年）年までの中国人留学生は百三人（満州国籍も含む）である。ちなみに、中国人に少し遅れて入学し始めた朝鮮人は合計八十九人、台湾人は合計三十人、その他西欧諸国を含む諸外国人は合計十七人であった。本学に残る記録文書を見ると、少数精鋭主義の美校はかなりの難関だったらしく、幾度か受験して漸く合格した人や入学を断念して私立学校に入学した人も少なくない。運よく合格した者は日本人生徒と隔てなく指導を受け、入学者の約半数が卒業

まで在学した。研究科にまで進み、日本の官設・在野展に出品して力量を認められた人たちもいる。

留学生たちのその後

しかし、朝鮮人・台湾人留学生のことはひとまずおいて、中国人留学生について言うと、大変革時代の厳しい社会状況のもとで果たして日本で習得したものを順調に発展させることができたのか。特にある時期からは社会主義革命に奉仕する制作活動に従事する以外に道はなく、日本留学のことは経歴上の疵になり、かの文化大革命（文革）の際などは日本留学の痕跡すら消し去らざるを得ない状況だったのでないか。日本留学は却って不幸を招いたのではないか、などと想像してしまうのだが、そうした想像を覆したのが最初に述べた林達川の遺作展なのである。

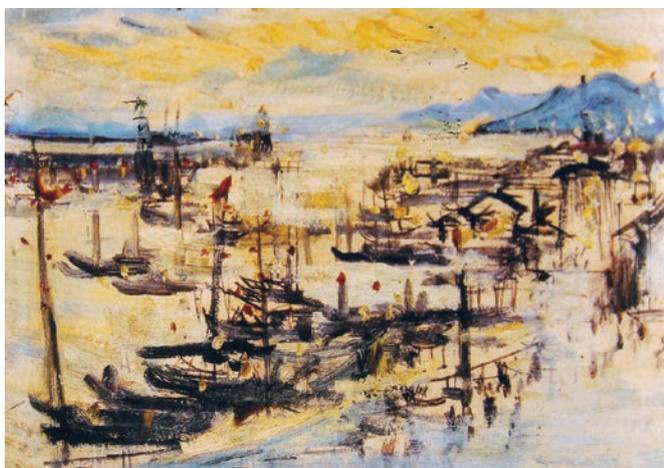
展覧会場に並べられていたのは林が一水会や日展に出品していた頃の穏和な自然描写の油絵の延長線上にある作品であった。文革のときは例に漏れず田舎に下放されたが、その間も風景などを題材とする小品油絵を淡々と描き続けていたらしい。そうした作風が今の中国人にはむしろ新鮮に感じられるらしく、美術学生らしい若者たちが絵の前に座り込んで熱心に見ていた。このことは、林のようにストレートにはないにせよ、日本で学んだことを基にして自分の芸術を追求していた人々がもつと居て、やがて評価される日も来るだろうという希望的観測を筆者にもたらししたのであった。

（よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室）

次号予告

上野児童音楽学園 昭和八年六月～昭和十九年

昭和初期から戦時中にかけて東京音楽学校で行われた音楽の早期教育機関。ヨーロッパ視察を終えた乗杉嘉壽校長の発案により、昭和八年に同声会（同校の同窓会）を母体として開園した。空き教室を活用し、同校の教師や研究科生徒が指導に当たった。プリングスハイム指揮のマラーの交響曲第三番の演奏会にはドイツ語の合唱で出演し、批評家も「子供の合唱がいちばんうまかった」（大田黒元雄）と絶賛した。戦況の悪化に伴い、昭和十九年の秋に閉鎖された。



右：劉錦堂（王悅之）筆 卒業制作 母と侍童 1921年
左：林達川筆 港灣速写 1970年代 遺族蔵



Interview with the **Brilliant** **S**tudents

受賞学生インタビュー

藝大に在学している学生たちは、多くの公募展やコンクールで栄誉ある賞を受けている。受賞学生たちが賞にいたる努力とさらなる意欲を語る。

新連載

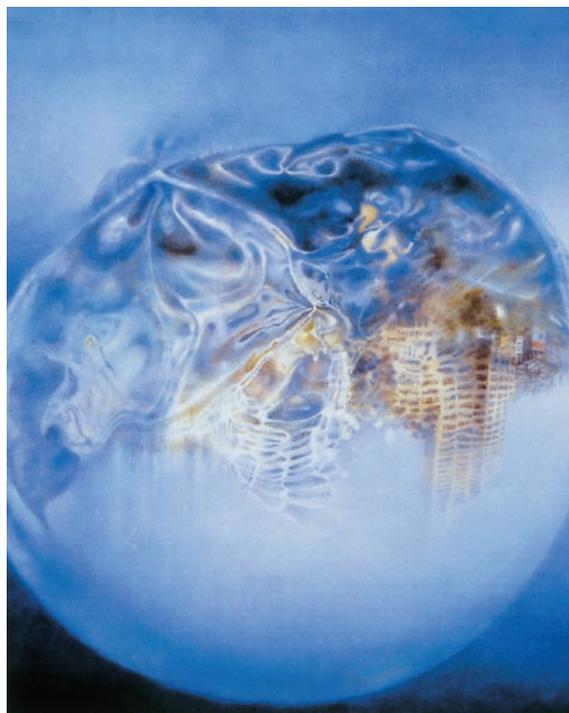
福島沙由美

◆美術学部絵画科油画専攻三年

トーキョーワンダーウォール公募二〇〇八大賞
第二十六回上野の森美術館大賞展大賞



トーキョーワンダーウォール公募2008大賞受賞作品「浸染39.5°C」
oil, canvas 130.3×194cm



第26回上野の森美術館大賞展大賞受賞作品「視点の境界線」
oil, canvas 162×130.3cm



ふくしま・さゆみ
1982年東京生まれ。個展に「浸透染着」ギャラリーQ（東京・2005年）、「颯鏗硝」ギャラリーQ（東京・2006年）、「緋霜」ギャラリーQ（東京・2008年）、「トーキョーワンダーウォール都庁展」東京都庁（東京・2009年）がある。2009年4月28日～5月11日まで上野の森美術館ギャラリー（東京）「第26回上野の森美術館大賞展・入賞者展」、6月6日～28日まで「TWS-Emerging 2009」トーキョーワンダーサイト本郷（東京）に参加予定。

子

子供のころは絵を描くのが大嫌いだっただんです。物語をイメージして描くように言われても、見たことのないものは描けないとずっと思っていました。

小学校五年生のとき、買ってもらったばかりのお気に入りの靴を描いてみたら、「みんなのお手本にしよう」と褒められたのがうれし

くて、調子に乗って美術部に入ったんです。中学二年のときにはコンクールで、水道のポスターが都知事賞を取りました。油絵に絞ろうと決めたのは、高校二年のときです。

「トーキョーワンダーウォール」の公募展で大賞を受賞した作品「浸染39.5°C」は、大学に入る前から描いていたシリーズの延長線上にあるものです。

このシリーズは、気象をテーマにずっと描いているのですが、天候や気温は人に何らかの影響を与えていると思っっているんです。たとえば嵐の前線が近づいて気圧が下がると温度が上がると、人は虚無感に取りつかれます。また前線が通過して温度が下がると、人の気持ちは軽やかになると言います。今回の

作品に付けた「39.5°C」は東京都

の観測史上最高気温で、シリーズの総まとめとして、その数値からイメージしたものを描きました。

わたしの絵は、抽象と具象の中間のポジションにあるもので、そのどちらにも属さないと思っています。見たことのないものでどのように作品をつくるか、ということを探しているとき、モチーフがなかったら自分で創ってみようと考えたんです。

上野星矢

◆音楽学部器楽科（フルート）二年

第八回ランバル国際フルートコンクール一位

そこで取手校地のガラス工房に籠ってつくったオブジェを素材に作品を描くようになりました。

上野の森美術館の大賞受賞作「視点の境界線」も、ガラスの球体をモチーフにした作品です。ガラスとい

うのは固体でも液体でも気体でもない曖昧な物質で、それをおして世界を見ることで、ふだんは成立している世界が徐々に崩れてくるのです。しかも正円ではなく、凹凸があることで世界はより歪んできます。

また、この絵は上下を逆転しても逆さから見ることでもできるんです。ガラスの持つっている曖昧な属性と、どちらが正しいとは言いきれない不確かな視点をテーマにしています。大きな賞を受賞したことで、企画

展をはじめの作品を展示する機会が増えました。制作に追われる慌ただしい日々ですが、これからは見ず知らずの人がわたしの作品を見てくれるようになると思うと、プレッシャーでもあり大きな楽しみでもあります。

小

学校の吹奏楽部に隣の学校から熱心な先生が教えにこられるというので、入部してフルートを始めることにしたんです。音が大きい楽器には興味がなかったので、金管よりも木管、木管のなかでもフルートを自然に選んでいました。とても尊敬していたその先生が、ぼくが小学校六年の時に病気で亡くられました。先生には「将来は音楽家になってほしい」と言われていて、それから本格的に音楽家をめざすことを決意したんです。

中学一年の時に練習に打ち込んで挑んだ「全日本学生音楽コンクール東京大会 中学校の部」では奨励賞止まりでした。中学二年の時に出場

した同コンクールで、東京大会では一位を受賞し全国大会に駒を進めたのですが、全国大会では一位を逃してしまいショックで号泣してしまっただけです。あまりの悔しさと怒りでそれを境に人格が変わり、コンクールに対する激しい情熱も芽生ええました。

演奏スタイルも大きく変わって、練習したことを上手く出せることで満足していたものが、自分の表現を人に届けるために吹くようになり、その結果、中学三年の時に同じコンクールで全国一位を受賞することができたのです。

でも中学時代は音楽漬けというわけではなくて、サッカー部に所属してスポーツにも打ち込みました。サ

ッカーで得た反射神経や、流れを体で受け止める感性はいまでも役に立っていると思います。

藝大に入ってみると、周りのレベルの高さはものすごく、演奏に対するモチベーションや意識の高さを感じますね。高校の時と比べると大きな社会に出てきた感覚があります。

今回第一位になった「ランバル国際フルートコンクール」は、初めて参加する海外でのコンクールでした。フルートの巨匠ジャン・ピエール・ランバル氏が生前に自ら創設した、フルート界では大変権威のあるコンクールなのですが、参加してみた印象はとて「和やか」なものでした。コンクールを通して、好きな演奏家を見つけないという楽しみ方をしてい

る観客もいますし、審査員の先生方も気軽に話しかけてきてくれるのです。

また、海外のコンクールでは日本のコンクールに比べ、より独自の表現やアプローチ、パフォーマンスに対して関心が集まるように感じました。「演奏家ではなく、芸術家、表現者になってほしい」というある審査員の方の言葉は、胸に深く刻み込まれました。

技術が上手くなることで楽器に慣れてしまうということを、ぼくは避けたいと思っています。つねに新鮮で感動的にフルートに向き合い、演奏家ではなく表現者と呼ばれるようになりたいと思っています。



1位を受賞した第8回ランバル国際フルートコンクールでの演奏風景。2008年10月。



うねの・せいや
1989年生まれ。堀井恵、山田ゆう子、立川和男、ザビーネ・ザイフェルト、ヴァンサン・リュカ、金昌国の各氏に師事。2004年、大友直人指揮・東京交響楽団と共演。2005年、チェコフィルハーモニー八重奏団と共演。2009年3月17日（火）にはオペラシティ・イリサイタルホール（東京初台）にて演奏会を開催。

教員は語る

第十回

— 藝大への期待・抱負・提言 —

元倉眞琴

美術学部建築科 教授

×

尾高忠明

音楽学部指揮科 教授

もろさを抱えた 現代の学生たち

元倉 私は今から四十年前程前に藝大の建築科に通っていました。当時とは環境が大きく変化し、新たに総合工房棟が建てられたことから、私の在学中に比べると建築科の占めるスペースが広がり余裕ができました。内部も整備されましたし、学生たちも非常にきれいに使っています。

その学生の気質ですが、私たちの時代は学生運動が盛んで、学生も社会の重要な構成員として自覚していたと思います。それに比べると現在の学生たちは非常に素直で、先生が言ったことをノートに書き写すといった学び方はするのですが、アクティブに自らを開拓して自己を確立していこうとする気質がとても弱いように見えます。

私たちが学生だった頃は、叩かれても這い上がって

くるような逞しさがあつたと思うのですが、今は精神的にもろい若者が多いように感じます。教員のほうもずいぶん親切で、学生と密接に寄り添っています。昔は学生が教員を見限ったりすることがあり、それを成長の糧として学んだり学ばれたりという関係がありました。

尾高 私の家は複雑で、まず父は指揮者で作曲家だったのですが、ウィーンから帰国して武蔵野音楽大学で教えていました。母はピアニストでしたが、国立音楽大学で教えていました。現在、藝大の作曲科で教えている兄（尾高惇忠教授）は藝大生でしたし、私はいとう斎藤秀雄先生から指揮を学びたかったので、先生のいらした桐朋学園大学へ進みました。したがって、家族全員がバラバラの音楽大学に通っていたんです。ですから、私自身は藝大に来たことはなかったのですが、兄を通して藝大のことは聞いていました。

一九九八（平成十）年、藝大に新しい奏楽堂ができるとき、新しく入ったパイプオルガンのための曲を兄





が作曲することになりました。そこで弟が指揮者なのだからと私が初演することになったのですが、今にして思えばそれは画期的なこと、桐朋の指揮者が藝大に入った初めての瞬間だったのではないかと思います。そのときに奏楽堂で藝大フィルハーモニアを初めて指揮したのですが、その時の印象を聞かれて、藝大フィルってこんなにうまいんだ、しかもホールも大変素晴らしいかったです。このことが縁で、数年後にブラスを振ってほしいという依頼があり、その翌年から非常勤の客員教授として藝大に来ることになりました。

私は桐朋とウィーン音楽大学しか知らなかったのですが、藝大の学生は、本当に素直で音楽に対して純粋な心を持っています。外から見ていたときは、もつと闘争心があるのかと思っただけですが、和気あいあいとしながらも、オーケストラへの順応力も高く、非常に技術の優れた学生が集まっているという印象を受けました。また奏楽堂やプロのオーケストラがあるなど環境的にもとても恵まれていると感じました。

指揮者の経験 建築家の経験

尾高 私は英国で二十年近く仕事をしてきましたが、オーケストラに二十二、三歳の演奏家が入ってくると、

最初はとも子どもっぽいです。でもわずか二、三年で突然立派な紳士になるんです。ところが日本のオーケストラでは二十歳過ぎで入団したあと、いつまでも幼児性が残っているんです。英国と日本はいろいろな部分で似ているところがあると思うのですが、英国のほうが遅い気がします。

私が藝大でかわっているのは指揮科と学生オーケストラですが、オーケストラで演奏する学生のなかには、在学中に日本の一流交響楽団に入れるレベルに達する人がいますし、実際に卒業と同時に入団する人もいます。そうした若い演奏家を指揮台の上から見ていると、昔の演奏家のほうが個性が強かったという印象があります。最近の若い人はどこか遠慮がちで、もつと自分を主張しながら弾くようになってほしいと思うときがありますね。

もう一方の指揮者のほうは、外国でも大成するのは四十歳を過ぎてからです。ヴァイオリンの場合などは、三歳から始めて二十二歳にもなると相当弾けたりするのですが、三歳で指揮者を志す人はいません。指揮者をめざす人は、焦らずに大成してほしいので、前任校（桐朋学園大学）でもほかの学科にかかわらず指揮科だけは八年制にしてくれないかとお願いしていました。

元倉 指揮者が一人前になるのに時間がかかるというのは、建築の場合と同じですね。美術でもファイイン



元倉眞琴（もとくらまこと）
美術学部建築科 教授

一九四六年生まれ。

一九六九年東京藝術大学美術学部建築科卒業。七一年同大学院美術研究科建築専攻修了。横総合計画事務所を経て、一九七六年スタジオ建築計画設立。日本大学工学部建築学科、東洋大学工学部建築学科、東京藝術大学美術学部建築科の非常勤講師を経て一九九八年より東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科教授（二〇〇八年）。二〇〇八年より現職。

おもな受賞歴に一九九五年日本建築学会賞（熊本県宮電蛇平団地）、二〇〇〇年日本建築学会建築選奨（福岡大学A棟）、二〇〇二年日本建築学会東北建築賞（朝日町エコミュージアム創遊館）、二〇〇六年建築業協会賞特別賞（東雲キャンナルコート中央ゾーン）ほか。



©Masahide Sato

アートの人たちは二十代には名前が出てきますから。

建築というのは経験の仕事なので、経験を積めば積むほど、自分だけの表現ができるようになってきます。また社会性がやはり重要な要素で、大学のトレーニングだけでは絶対に社会では通用しません。大学を卒業した後どこかの事務所に勤めるなどして、早い人であれば三十歳前後で独立します。でも最初のうちは仕事が来ないので、知人の住宅を設計したりしていくうちに、才能がある人はそこから一気に伸びていくんです。少なくとも藝大の建築科は、卒業した次の日から現

場で役に立つ人間を教育するのではなく、そこから自分の力で大成する方法や資質を教授し、自分で自分をデイベロップメント(成長)させる力を身につけて世に送り出したいと考えています。すでにほかの工学系大学の建築学科では六年制に移行するところが増えていきます。これはつまり、四年間の勉強では足りないということなんです。

尾高 桐朋学園を卒業した二十二歳のときに斎藤秀雄先生に「はなむけ」の言葉をもらいました。「尾高は二十二歳だろう。二十歳過ぎでは音楽のことなんてわからん」。そして「仕事も来ないよ」と。随分な「はなむけ」ですよ(笑)。

「三十歳になったらだんだん仕事が来る。そうしたら無我夢中でやれ。棒を振れるならどんな仕事でもいいからやりなさい。四十歳になったら、今日の演奏はよかったかどうか、今日練習したのでよかったかどうかと反省しながら、いい仕事だけを選んでいきなさい。そうしたら五十歳になって初めて指揮者としてよちよちと歩き始めることができる」。

自分が三十歳、四十歳、五十歳になったとき、先生がおっしゃっていた言葉は本当に当たっていて、十年のスパンで人間は変わっていくように感じました。だから五十歳になったときがいちばん怖かった。先生のおっしゃった「第一歩」を歩き出さないといけないわけですから。先生の言葉に従えば、私は今六十一歳ですから、今が十一歳ということになります。

日本人の 芸術的アイデンティティ

尾高 東京音楽学校ができる以前に、日本人で指揮者になるという人はほとんどいなかったのですが、それでも目指す人はウィーンやベルリンに留学しました。

そうした私の先輩にあたる日本人指揮者の基本的な考え方は、模倣が第一だったんです。ともかくベートーヴェンはドイツ人の次にうまくなれ、ラヴェルはフランス人の次にうまくなれ、全てで二位がとれば平均すれば一位だと教わりました。しかしそういった考え方は、私が外国で指揮を始めたとき、間違った教えだと思うようになったんです。

英国の作曲家エルガーの曲を英国のオーケストラで指揮したとき、反応がとても心配だったので、「こういうエルガーもいいね」と聴衆がとても喜んでくれたんです。私がシヨスタコヴィチをパリでやったときも、日本人の指揮によるロシアの音楽だけどロシア人の指揮者とは違うよさがあったとフランス人が批評してくれました。

日本には豊かな歴史があるので、日本人は芸術的にもとても可能性がある民族だと思います。だからこそ、西洋音楽の場合には型にはめるのではない、自分たちのアイデンティティを生かした教え方がいいと思うのです。

元倉 日本の建築家に西洋コンプレックスがなくなつたのはわりと最近のことなんです。かつて日本の建築家は、外国の優れた建築を自分なりにアレンジして表現していたのですが、日本独自のオリジナリティが外国の建築家に評価されるようになったのは、ここ二十年くらいのことでしょう。たとえば安藤忠雄さんがヨーロッパで評価されるようになったのが、日本人建築家のオリジナリティが注目されるきっかけだったかもしれません。

建築の世界では国の垣根を越えた国際化が急速に進んでいます。ですから次に藝大が担うべき課題はやはり国際化でしょう。藝大は日本では一番の芸術大学だと言われていますが、海外ではまだあまり知られていません。国際化は藝大の要求であり、世界的な要請で

もあります。こういったことにこれからは道筋をつけていくべきだと思います。

建築科では二〇〇九年度から、イギリス人の教員を教授として迎えることになりました。藝大で長らく非常勤講師を務められたあと、シドニー大学で教授をされていた方です。こういった学科の中心に外国人の教授を据えるというのは、国際化という面では画期的なことではないでしょうか。

尾高 私たち日本人音楽家にとってありがたいのは、武満徹という作曲家が世界的に評価されたことです。武満さんの作品を演奏したことがない一流オーケストラは世界のどこにもありません。

私が海外で指揮を始めたころは、武満さんの曲を採り上げても知らないというオーケストラがありました。が、今はどこに行ってもこの曲は演奏したことがあると言われるようになってきました。私たちは武満さんによって日本人の音楽の原点、アイデンティティがあると堂々と言えるようになってきたんです。

鎖国の時代から急に開国したとき、ヨーロッパの音楽界はすでに現代音楽に近い状態で、音楽が崩れ始めていたんです。日本人はそうした状況のなかから作曲を始めようとした。武満さんも最初はアメリカのジョン・ケージという作曲家と深い交流があり、非常



に前衛的な曲を書いていたのですが、お歳を召されていくうちにどんどん変わってきたのです。あるとき武満さんが私に「忠さん、今度はシェーンベルクを勉強しようと思う」と言うのです。シェーンベルクは無調や十二音技法で知られる作曲家ですが、初期には後期ロマン派のとてもきれいな曲を書いていました。そして次にお会いしたときは「今はマーラーに凝っている」、その次は「今はブラームスをやっていて、今度はベートーヴェンを勉強しなければいけない」とおっしゃるんです。普通は古典から現代へと勉強していくのですが、武満さんは自分が生きている時代から遡っていったんですね。ですからロマン派の作曲家を勉強し始めてからの武満さんの中期から後期にかけての曲はものすごくきれいなんです。

元倉 実践的に理解していこうとすると、歴史を逆にたどるという学び方になりますよね。たとえばル・コルビュジエはどうしてこのようなデザインをしたのだろうかと考えていくと、その前の時代のことを知りたくなります。そういった積み重ねによって、物事の本質が深さで理解できるようになってきます。

尾高 もうひとつ申し上げておきたいのは、日本人である私たちが邦楽をあまりに知らないということです。私は、日本の基礎教育として邦楽の箏の音、三味線の

音、鼓の音といったものを聞く機会を増やしたほうがいいと考えます。

もともと洋楽と邦楽では音階的にも違っていて、日本の音楽には小節線がなかったんです。小節線がないということは、自由さやフレキシビリティがあって、そこに間合いをとることで「わびさび」につながったわけですね。しかし、邦楽にあまり接することなく西洋音楽を勉強している私たちは、小節線で区切られ、またコンピュータライズ化され、間合いが掴めなくなってきたんです。ですから、原点である邦楽を学ぶことによって、より日本的なクラシック音楽の演奏ができるのではないかなと思います。

元倉 ヨーロッパに建築を見に行くと、道で出会った人が建物や街のことを非常に誇らしげに、しかもきちんと説明できるんです。ところが日本の街で「あの建物は何ですか」と聞いてもきちんと説明してくれる人はほとんどいないでしょう。ものに対する文化の違いかもしれません。私たちが日本人はせっかいいものを持っているのに、誇りを持って説明できないのはとても残念なことです。邦楽についても同様ですが、日本の伝統や文化について、日本人がもっと愛着をもって接することができたらいいですね。その意味でも、教育の果たす役割は小さくないと思います。

尾高忠明（おたか・ただあき）
音楽学部指揮科 教授

一九四七年生まれ

一九七〇年桐朋学園大学音楽学部指揮科卒業。一九七二年ウィーン国立音楽大学指揮科入学。
東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、BBCウェールズ交響楽団、読売日本交響楽団、紀尾井シンフォニエッタ東京、札幌交響楽団の常任指揮者・首席指揮者などを歴任。
二〇〇四年から現在まで札幌交響楽団音楽監督。二〇〇八年九月から新国立劇場芸術参与（次期芸術監督予定者）。

二〇〇四年東京藝術大学指揮科非常勤客員教授。二〇〇八年より現職。
一九九一年第一三回サントリー音楽賞受賞。一九九七年英国エリザベス女王より大英勳章CBEを授与。一九九九年英国エルガー協会より、日本人初のエルガー・メダルを授与。

NEWS

2008.8~2009.1

出版会活動

◆「榎田伸也…通り過ぎた風景」を十一月十七日に出版

一九六〇年代から独創的な風景画を描き続け、フラットでありながら不思議な奥行きを感じさせる新たな風景画の境地を切り開いた画家・榎田伸也。その初めての本格的な作品集がリリースされた。本書は、榎田の代表作約一〇〇点を収録するほか、日々の制作で触発されたイメージを多数織り込み、画家の驚くべき緻密で自由な発想のプロセスをたどる。



◆DVD「大学院映像研究科第二期生修了作品集二〇〇八」を十二月十日より販売

二〇〇八年三月に修了した映画専攻第二期生。一年次から短篇、長篇と制作実習を重ねてきた監督領域を中心とする各領域の学生たちが、その集大成として取り組んだ修了制作全六作品を今年もDVDとして発売。

収録される作品は、第五十六回サンゼバスチャン国際映画祭の新人監督コンペティションと第九回東京フィルムメックスのコンペティションに正式出品された

『PASSION』（濱口竜介監督）をはじめ、今後の活躍が期待される監督たちの作品群である。



東京藝術大学出版会の出版物等は、藝大アートプラザおよびアマゾン（ネット販売）にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇・五五二五・二二〇二）まで。

交流

◆大学間国際交流協定締結

十月二十四日、ミラノ工科大学（イタリヤ）と本学は、美術、デザイン及び建築に関する教育、研究及び交流の分野で協力することに同意し、芸術国際交流協定を締結した。この調印により、本学における交流協定締結校は十六カ国（地域）、三十九大学等となった。

◆東京藝術大学と台東区が連携協定を締結

十月二十四日、本学と台東区は、地域の芸術、文化、教育、まちづくり、産業等の振興のための連携協定を結び、区内ホテルで開かれた調印式で宮田亮平学長と吉住弘区長が協定書に署名した。



これまでも本学と台東区は、さまざまな分野を通じ、数多くの交流・連携事業を行ってきた。

今回の協定は、これまでの連携関係を総括し、今後の各種事業の充実・発展と

円滑な推進を図ることを目的に締結されたもの。

◆東京藝術大学と荒川区が芸術・文化振興のための連携に係る合意書を締結

十二月十八日、本学と荒川区は、地域における芸術・文化振興と大学における芸術教育活動の発展を図るため、相互の人材、物的資源を最大限に活かし、芸術・文化振興に係る諸事業を、連携協力して実施していくことを目的に合意書を締結した。

受章・受賞

◆藤原信幸講師が藤田喬平賞・観客賞を受賞

受賞者氏名：藤原信幸（工芸科講師）
受賞作品名：「植物のかたち」（技法：宙吹き／フュージング／木彫、糸）
日時：平成二十年八月二十七日

◆堀越謙三教授がフランス芸術文化勲章「シュバリエ」を受章

受賞者氏名：堀越謙三（映画専攻教授）
受賞作品名：フランス芸術文化勲章「シュバリエ」叙勲
日時：平成二十年九月五日

◆北野武教授が「第四十九回テッサロニキ国際映画祭」（ギリシャ）ゴールドレクサンダー名譽賞を受賞

受賞者氏名：北野武（映画専攻特別教授）
受賞作品名：「第四十九回テッサロニキ国際映画祭」（ギリシャ）ゴールドレクサンダー名譽賞
日時：平成二十年十一月十八日

◆佐藤雅彦教授と桐山孝司准教授が「第十二回文化庁メディア芸術祭」エントラテイメント部門優秀賞を受賞

受賞者氏名：佐藤雅彦（メディア映像専攻教授）
桐山孝司（メディア映像専攻准教授）
受賞作品名：「第十二回文化庁メディア芸術祭 エントラテイメント部門優秀賞」
受賞作品名：「君の身体を変換してみよ」展

◆伊藤有孝教授が「第五回中国国際アニメーション&デジタル・アート・フェスティバル」ベストテレビジョンプログラム部門最優秀賞を受賞

受賞者氏名：伊藤有孝（アニメーション専攻教授）
受賞作品名：「第五回中国国際アニメーション&デジタル・アート・フェスティバル」ベストテレビジョンプログラム部門最優秀賞
日時：平成二十年九月二十九日

◆山村浩二教授が次の四賞を受賞

受賞者氏名：山村浩二（アニメーション専攻教授）
受賞作品名：「第十二回広島国際アニメーションフェスティバル」グランプリ
受賞作品名：「カフカ 田舎医者」
日時：平成二十年八月十一日

◆賞名：「第五回中国国際アニメーション&デジタル・アート・フェスティバル」審査員特別賞

受賞作品名：「校長先生とクジラ」
日時：平成二十年九月三十日

◆賞名：「第九回ブラチスラヴァ・アニメーション・ピエンナレ」アルビン・ブルノフスキー名譽メダル

受賞作品名：「子どもの形而上学」
日時：平成二十年十月十八日

◆日本音楽サマースクール

八月二十日から二十八日まで、日本音楽サマースクールが実施された。これは、日中韓の芸術系大学十一校が国を越えて協力し、芸術の発展への貢献と、芸術を通じた豊かな国際社会の構築を謳った二〇〇七年十月の「芸術宣言」を推進する「アジア芸術宣言プロジェクト」のひとつ。中国および韓国の姉妹校

と連携を強化し、さらなる芸術教育の革新と新しいアジア芸術文化の創造を企図して、中央音楽学院、上海音楽学院（以上、中国）、ソウル大学音楽大学、韓国芸術総合学校伝統芸術院（以上、韓国）から学生を各校二名ずつ招き、日本音楽（箏曲生田流）の短期研修を行った。



最終日に開催されたミニコンサートで研修生らは、「さくら変奏曲」と「六段の調」の一部を演奏し、さらには、自国の民謡「茉莉花」（中国）と「アリラン」（韓国）を箏曲にアレンジして披露し、研修をサポートしてきた藝大生たちに新鮮な印象を与えた。

◆藝大リサイタルシリーズⅡ

本学音楽学部では八十名ほどの常勤教員が、さまざまな分野で学生たちの指導に当たっているが、そのほとんどが、教員であると同時に優れた演奏家である。二〇〇七年度からスタートした「藝大リサイタルシリーズ」は、そうした教員たちが、演奏家としての技量を発揮できる場を設け、その財産を社会に還元していくことを目的に企画されたコンサート。今年九月九日から十六日まで、ピアノの迫昭嘉教授、ヴァイオリンの玉井菜採准教授、山田流箏曲の萩岡松韻教授、クラリネットの山本正治准教授というジャンルの異なる四人の教員が、意欲的なプログラムを自ら組み、好評を博した。

◆藝大アーツイン 東京丸の内

本学が文化・芸術活動の情報発信を行って世にときめきをもたらす、街の活性化を図るとともに魅力ある街づくりを推進することを目的として、三菱地所（株）との共催で丸の内丸ビルを会場に

音楽学部の社会連携にはちょっと驚かされた。年末恒例のチャリティ・コンサート藝大メサイア（朝日新聞社主催）が今年で59年目、伊澤修二先生記念音楽祭（伊那市高遠町）が23年目、地元の合唱団と連携した台東第九公演（台東区）が29年目と、ともに大変長寿なことだ。

長く続くものには共通の秘訣が必要だ。質が高いレベルで保たれていること。ニーズが常に存在すること。そして何より強い義務感、誇りや愛情といったモチベーションの高さが不可欠だ。短期的には、面白い、珍しいといったアイデア勝負に終始しても何とかなるが、長くは保たない。音楽という芸術文化が一度開花した時の根の深さは、相当なもの、長期戦になることを改めて知った。

考えようによっては、これからの高齢化社会は豊かな時間を楽しむ社会であり、クラシックや邦楽のユーザーの増加が予想される。音楽文化への社会の期待度はさらに大きくなる、そんな時代を迎えようとしている。

藝大通信編集長
長濱雅彦

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式Webサイト (<http://www.geidai.ac.jp>) をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館 Tel. 050-5525-2200
NTTハローダイヤル Tel. 050-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学音楽学部演奏企画室
Tel. 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットぴあ Tel. 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5815-5452

藝大アートプラザのご案内
(株)藝大BioN(ピオン)
Tel. 050-5525-2102
Fax 050-5525-2486

開催するイベント。

二年目となる今年は、十月六日から十三日まで、宮田学長と女優岸恵子さんのトークショーや邦楽、マリimba、スクエア・ピアノなどの演奏会や藝大神輿の展示などさまざまなイベントを行い、丸ビルを訪れた人々をアートの世界に誘った。本学と三菱地所は、同イベントに限らず、さまざまな形で丸の内文化力を高めるために連携協力していくことを合意しており、オープニングセレモニーでは、宮田学長と三菱地所木村社長による連携協力に関する覚書の調印式や、藝大生への支援として新たに始まった「三菱地所賞」受賞者記念リサイタルなども行われた。

◆田中コレクシオン展を開催

十月十七日から十一月三日、一月八日から二十五日までの間、正木記念館一階で田中コレクシオン展が開催された。これは、一九五〇年、平瀬田中教授（当時）により寄贈された自作二十七点を含む彫刻作品一三三三点に由来し、その後、数次にわたる追加寄贈を加えた計一四八点にのぼる近代彫刻コレクシオンである。一九六六年から、これらの作品は展示されてきたが、芸術資料館から大学美術館への改組・施設新築（一九九八年）に伴う閉鎖を経て、二〇〇七年十月、正木記念館一階を使用し再開された。開室は不定期ながら一般にも公開されている。

今年度は米林雄一、山本正道両教授の退任記念展に合わせ開催された。



◆輝く書物―中世写本ファクシミリ選― 附属図書館所蔵貴重資料展

十月二十七日から、本学附属図書館二階目録室を会場に、同館が所蔵する七十点余の西洋中世写本のファクシミリ・コレクシオンの一部を展示公開し、印刷術が発明される以前の中世ヨーロッパにおいて、芸術作品として制作されていた写本という媒体の魅力と、その興味深い発見の真相を紹介展示した。ファクシミリとは原本にできるだけ似せて作った写真複製本のこと。現在では印刷技術の発達によつて原本と変わらないほど真に迫る極めて精巧なものが刊行されており、研究、鑑賞両面において重要な役割を果たしている。附属図書館では、この中世写本の豪華ファクシミリ版を長年にわたって積極的に収集し、国内有数のコレクシオンを有するに至っている。

◆感動を心に響かせる「学長と語ろう トーク&コンサート」

十一月十五日、第四回「学長と語ろうトーク&コンサート」が、ゲストに東洋大学総長で元財務大臣の塩川正十郎氏を招いて開催された。

第一部で塩川氏と宮田学長は、まず、「感動が大事である」という意見を互いに披露し合い、「政治や教育には（感動）が不可欠」と、人の心を揺さぶる（感動）の力の重要性を確認し合った。

さらに塩川氏は「人間の豊かさや生き甲斐は文化の薫り高い世の中でこそ感じられるもの。藝大には、社会に創造的な豊かさをもたらし、時代を切り拓いていく大学になってほしい」と期待を述べた。



第二部では、本学で学ぶ留学生によるコンサートが開かれた。香港からの留学生が作曲した日本の箏と笛の曲の演奏や、オーボエ、尺八の演奏に加え、その多くがすでに母国で一流の奏者である留学生

たちによつて奏でられる民族楽器の音色に聴衆は大いに沸き、満場の喝采がなによりも雄弁に彼らへのエールとなつて響いていた。

◆第三回 藝大アートプラザ大賞入賞作品展

十一月二十六日から十二月二十四日まで、第三回「藝大アートプラザ大賞作品展」（作品テーマは「絆」）が藝大アートプラザにて開催された。これは学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため平成十八年度から実施している学内アイトコンペで、厳正な審査を経た入選作品を展示、販売するもの。三回目を迎えた今回は、総勢三十七名（七十点）の応募があり、そのなかから選ばれた三十五名（六十一一点）の作品が会場を飾った。

第三回藝大アートプラザ大賞を受賞したのは、美術学部彫刻科に在籍する中村弘峰さんの作品「結ばれた天体」。中村さんは第一回に続き二度目の大賞を受賞。



◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数 平成二十二年一月三十一日現在

賛助フレンズ 個人一五二名 法人五団体
特別賛助フレンズ 個人二〇名 法人〇団体

◆今年度下半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

大学美術館
狩野芳崖 悲母観音への軌跡―東京藝術大学所蔵品を中心に
会期 八月二十六日～九月二十三日
入場者数 二万二六三名
台東区コレクシオン展 日本絵画の源流、敦煌莫高窟壁画模写
会期 八月二十六日～九月二十三日
入場者数 一万四二六名
線の内匠たち―アムステルダム歴史博物館所蔵 素描・版画展
会期 十月十一日～十一月二十四日
入場者数 二万三三六名
奏楽堂
藝大21 和楽の美 邦楽で綴る「平家の物語」前編
開催日 九月十一日
入場者数 五五九名
藝大オペラ定期第五十四回 G・ヴェルディ「ファルスタフ」全三幕
開催日 十月四日、五日
入場者数 八四一名、八五三名
第四十回 藝大生オケストラ定期
開催日 十一月二十八日
入場者数 九二四名

